

破れ単衣に三味線だけばよされよされと雪が降る  
(風雪ながれ旅)

赤い夕陽が校舎を染めてニレの木陰に弾む声 (高校  
三年生)

廻し合羽も三年鳥意地の縞目もほつれがち (箱根八  
里の半次郎)

右の3つの歌

皆さん一度は耳にされたことと思います。

これに限らず、日本の、特に昭和の歌には、  
こうした七七七五調の歌が多くあります。

つまり、この七七七五というリズムは、日本人に  
とってまさに慣れ親しんだリズムと言えます。

そして、都々逸もこの七七七五の短詩文芸なのです。

もともと「唄う」ことを前提に作られた定型詩な  
ので、リズムには「こだわり」があつて、  
この七・七・七・五形を  
さらに細かくしたルールが設けられています。

### く三四、四三、三四、五く

まずこのリズムを踏襲しないことには「都々逸」と  
認められない、ということ覚えてください。

例えば「箱根八里の半次郎」を例にしますと：  
廻し(3)、合羽も(4)、三年(4)、鳥(3)、  
意地の(3)、縞目も(4)、ほつれがち(5)と  
なります。

また、最初の七を「上七」、二番目を「中七」、三番  
目を「下七」、最後の五を「座五」といい、  
上七と下七には字余りが認められています。

そんな騒ぎも夜露と消えて七十五日の語り草  
(吉住義之助)

昼寝の縁側尻尾が揺れて猫は夢まで猫になる  
(横田輪加造)

万歳土下座のどっちもできず尖った  
まんまの石ころ (佐藤孔亮)

1つめは「下七」が、2つめは「上七」が、3つめ  
は「上七」「下七」が「四四」になっています。

字余りが認められているのは「上七」と「下七」だ  
けで、それも四四形に限られます。

あと、字余りではありませんが、中七は四三形の他  
に二五形が認められています。

地球儀回してみる空しさは俺もいつかは無にかえる  
(西潟賢一郎)

以上の形の通りになっていれば、

それは立派な「都々逸」です。

しかし、もう1つ

「やってはいけないこと」があります。

川柳では「くしてしまい」とか「く子に聞かせ」な  
どの連用形で終る句が多くありますが、  
都々逸ではそれを「川柳止め」といつて嫌っていま  
す。

なるべくならこういう止めかたを避け、簡潔に結ぶ  
というのが都々逸の「心」ではないでしょうか。

以上のことを踏まえ「しぐれ吟社」の歌会で採られ  
た作品を鑑賞してみてください。

そして、もし興味がありましたら、ぜひとも「実作」  
に取り組んでみてください。

都々逸は昔でこそ「大人の色恋」とか「男女の手續  
手管」を詠じた歌が多くありましたが、

現代都々逸・街歌は「日常」「心象」「生活」を詠じ  
る詩です。

自由な感性と表現で、皆さんなりの「都々逸」を作  
ってみてはいかががでしょうか。

以上は冒頭のインターネット・ホームページからの  
転記です。